

3 ランブン州森林火災モニタリング支援総括

(JICA森林火災予防計画プロジェクト作成)

1997年11月10日

添付資料:

1. 林業省・自然保護センター所長面談結果
2. ランブン州林政局・自然保護部長及び森林火災対策本部職員との面談結果
3. ランブン州の森林火災状況(1997年4月-11月4日)
4. ランブン州森林火災記録(区域別)

コメント:

1. 今回の空中モニタリングにおいて、様々な火災の形態を十分観察することができた。今後プロジェクトにおいても十分比較分析し、火災対策検討のための資料としたい。
2. ランブン州の火災の形態は大別して、泥炭層の火災、山岳地帯(国立公園)の火災、その中間の山地帯及び造林地、プランテーションの火災であるが、地形、土壌、植生、及び出火原因の形態によって、かなり差異がある。延焼速度、面積の点から緊急を要するのは明らかに泥炭層での火災で、地中火はなくとも地表植生(下生え、灌木、枯損木)及び風速次第で火が急速に拡大する危険性がある。また残り火も長く地表・地中に残存し、別の二次火災を招く危険性も高い。かつ周辺には集落もなく、地上からの発見が遅れがちであり、煙の探知を主体として空からの発見に対する期待が大きいと言える。
3. 今回の火災モニタリングでは相当数の煙が山地頂上部付近で発見されていた。殆どは人為火災あるいは火入れが原因と思われるが、発見、消火のためのアクセスが非常に困難であり、空からの対応が今後期待される。火の形態も複数の樹木から煙が上がっているものや、狭く限られた地点から煙が線状に発生しているものもある。後者の場合初期の火災か意図的な火入れによるものかもしれないが、いずれの場合も延焼のパターンを継続的に観察する必要がある。二次林や灌木、造林地域ではやはり下生えの繁茂、樹木の乾燥、及び風により延焼の危険性が高い。
4. 山岳国立公園地帯のようなまだ状態のよい森林の火災は、林内に下生えが少なく、また林内、樹木に湿気が多く含まれているために、急速な延焼の危険性は

比較的少ない。しかし、地形が急峻なことや、近くに消火施設がなく水場も遠いことなどから速やかな消火作業がはかどらず、火が長く地上にとどまることも予想される。また、急峻な地形に加えて樹冠が空を覆っているため、衛星も火や煙を探知しにくいかもしれない。煙が上空へ舞い上がっている場合は別として、空中からの偵察も含めて、初期段階でのいかに早く発見するかが今後の検討課題であると言える。

5. また林業省職員の話では、ある造林地帯では樹上に煙や火炎が検知される前からすでに地表火が相当程度進行していたケースが認められている。こうした場合は地上での消火対策を速やかに実施しない限り対応が困難となる。一部の火災では上空から認められた火や煙以上に、地表部にさらに火が拡大している可能性もある。
6. 今回のモニタリングの結果から、空からの火災の発見において特に強みを発揮するのは山地帯、特に頂上部の火災、森林内部の泥炭層火災等陸路でのアクセスの困難な地域の火災の発見であると思われる。今後のモニタリング手法を充実させるために、NOAAのホット・スポットのデータと空からのモニタリング結果を比較検討して、互いの長所や制約について再確認を行うと同時に、両者の情報活用のノウハウを蓄積していくのが有益であると思われる。
7. また、今回の上空からの火災の発見においては焼畑、プランテーション等の火入れ地域と森林火災地域との区別が焦点となった。今回の空中写真からは、焼畑の新たな造成のための火入れでは地上に倒木が散在しており、火入れもその畑地の中から行われている状態がよく観察された。こうした場合、畑地内部からの火や煙であれば明らかに火入れであり、その周辺の森林や立木が焼失している場合は焼畑からの延焼と考えられる。
8. やや難しいのは、休耕地・休耕地の再開墾に伴う草地の火入れであった。この場合は実際の土地利用状況など地上からの情報との組み合わせが特に重要である。焼畑の場合は畑地境界が山地斜面に沿って認められるケースもあり、火や煙が小規模であれば問題はないものと思われるが、周囲の状態の変化等の継続観察が必要であろう。プランテーション造成の場合には火入れの規模も大きく、実際火災と区別がつきにくい。一般には道路などのインフラ整備が進んでおり、上空から認められることもある。しかし火災か火入れか断言は難しい場合も少なくない。今後その手法について検討を重ねる必要がある。
9. 今回空からのモニタリングにおいては、その火災現場だけでなくその周辺地域

の土地状態についての情報が非常に貴重であった。以後のより確実な分析の上からも、こうした火災現場周辺についての情報は極めて重要である。つまり延焼は認められていないか、集落、畑地の有無も含めて火災に大きな影響を与えるような土地利用形態や土地状態は観察されないか、等の情報である。

10. 今後こうした火災跡地及びその周辺部の追跡調査を実施するのは火災メカニズムの把握や今後の対応策検討のためにも有用と考えられる。さらにこうした火災を発生させないための様々な防火手法を検討していく上でも、このような現地データは非常に貴重な資料となる。

10月31日

1. 現在の主な森林火災区域は Bukit Barisan Selatan (BBS) 国立公園付近の Canguh(600ha 焼失)、Seminung 山 (160ha 焼失)、及び Sekincau 地域 (120ha 焼失) である。ただし Canguh 地区は一応鎮火しており、その跡地のチェック (モップアップ) のために、レンジャー50人が待機中である。天然林地域の火災は湿った樹木が多く下草が少ないため延焼速度は遅い。火災対策としては防火帯の設置が第一であり、特に Seminung 山付近では全長 10km、幅 30m 程の防火帯を設置している。BBS 国立公園での消火の問題点は地形が急峻であり、水場から火災現場までのアクセスが極めて困難な点である。しかしポンプとホースがあれば遠隔地の消火もはかどるであろう。
2. 10月30日には、50km 西の保安林において火災が発生している。州営林局が Caliandra、Sonokeling、Sonobritz といった樹種を用いた復旧造林が実施されている地域である。
3. 報告書によれば Way Kambas 国立公園 13 万 ha のうち 4 万 ha は火災危険地域である。草原・泥炭層が相当程度広がり、延焼の危険性が非常に高い。しかし泥炭層分布図はまだ作成されていない。主な危険地域は Plang Hijau (PLG と略) 及び Kali Biru という地域である。火災地域での動植物への影響はまだ把握されていないが、現場レンジャーからの話によれば、特に小動物が多く逃げ遅れて焼死した模様である。
4. 林業省はヘリコプターが 10 機保有しているが、維持経費削減のためジャカルタにある外部機関に委託しており (2 機が MABES POLRI: 中央警察署、8 機が民間業者)、必要時に使用するシステムとなっている。パイロットはポゴールの空軍から充当されている。年間計画ではランブン州でも年 2 回ほどヘリコプターを使用する機会があり、1996 年には BBS 国立公園境界チェックのために使用された。ただ森林火災予消防目的での利用はまだない。
5. 林業省本省では 1986 年ドイツ MBB 社から Transer C-190 という消火用飛行機の供与を受けた経験があり、現在民間貨物航空会社の Pelita がその管理に当たっている。消火用水は最大 12 トン搭載可能であり、放水のための水タンクを搭載できるようになっているが、その水タンク装置は各州にて確保することとなっている。その点、ランブン州には水タンクがなく、せつかくの飛行機が使用できない状況にある。
6. その他にも軍用機 Puma、及び農業省所有機 Piratos 等もあり、中央での判断の後借用を行うことができる。

7. 消火のための人材としては林業省職員（国立公園等のレンジャー）390人、地方政府機関関係者90人、軍関係者50人、警察関係者50人が現在活動中であり、その他にも地域住民も必要に応じて動員されている。また各機関に火災対策本部（POSKO）も、林業省林政局に1ヶ所、その管轄下の自然保護センター、BBS及びWay Kambas国立公園に各1ヶ所、及び州政府営林局州レベルに1ヶ所そして各県レベル営林支局に計6ヶ所、合わせて11ヶ所に設置されており、現場からの情報はこうした各対策本部を経て林政局対策本部に無線で通報される仕組みとなっている。

ランブン州林政局・天然資源保全部長及び森林火災対策本部職員との面談結果

11月4、5日

1. 延焼中の重大森林火災区域がまだ3ヶ所あるが、特に Gunung Padang、Way Kambas、Tangkit Tebak 付近が深刻である。ただし Way Kambas 地区の火災位置の判定は地上からは難しい。
2. 火災の情報収集においては、現地（県、郡レベル）の対策本部から林政局内対策本部に無線にて地上調査による火災発見結果を送信できる体制になっている。また林政局内から4人を指名して2人ずつ交代で現場見回りに当たっている。
3. 火災現場の消火体制としては人海戦術及び農機具等の簡単な機材を用いて、主に地域住民、レンジャーが消火に当たっている。地方組織及び郡部からも時々支援があるが、消火作業は彼らの本来業務ではない。圧倒的な機材不足に直面しており、どの火災地域でも防火帯を開設し延焼を防止するのがせいぜいである。森林火災に対する直接的消火作業ははかどっていない。林業省本省からはハンド・ツール等の支給があるが重機材はまだない。全般的にはポンプの需要が高い。
4. Way Kambas 国立公園のような湿地帯では、自然生態系を破壊しない程度に小規模に水路を巡らし海水を導入することで火災区域を分離するとともに消火用水の確保も図られる。また、公園内には小河川があるのでそこからポンプを用いた消火作業も検討されうる。一方中部山地帯の消火では農業省所有機ピラトスを借用しての空中消火も検討されている。
5. Way Kambas 国立公園の火災の原因は多様である。もともと可燃物除去のため及び草地の拡大防止のためのコントロールされた火入れは頻繁に行われていたが、本年ほど公園内部が大規模に焼失したことは過去にない。原因としては公園外南部の集落での火入れの他、住民の公園内での密猟、盗伐そして入園者の火の不始末が原因と考えられている。特に沿岸部から内陸河川に向かって魚の不法捕獲のために入ってくる住民が多い。
6. このような現状を鑑みた場合、消防隊の組織等の消火対策も重要であるが、それよりもそうした火災を発生させないための防火対策の充実の方がより重要であり、周辺住民の意識向上のために普及活動の一層の拡大に努めたい。また、火入れを行わなくてもすむような農業技術開発・普及のため住民との共同モデル事業を検討すべきであるが、資金不足もあり林業省単独では難しい。
7. ランブン州林政局で入手した情報はボゴールの林業省自然保護総局・森林保護局に報告され、以後そこからジャカルタの環境管理局や Bakornas 及び BPPT に情報が送付される。また必要があれば林政局から直接ジャカルタの諸機関に情報を提供すること

も可能である。ただし中央で受けた情報は必ずボゴールの本省を經由してランブン州林政局に届けられることになり、その入手にはかなり時間がかかる。

8. 林政局としても今回の日本緊急援助隊の空からの火災モニターに大変関心があり、できれば写真、データの提供を受けたい。

ランブンプン (Lampung) 州 の 森林火災状況

1987年4月 -- 1987年11月4日

No	日付	場所	面積	被害	火災原因	消火状況	備考
1	4月29日--6月7日	96年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	3.0	焼葉造林木	- 住民の不法開墾の火入れ、また不法焼畑農民の活動が盛く、 - Sweet Indolampung の移住事業のための主要道路建設。 - 異常乾季		
	6月11日	93年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	30.0	焼葉造林木			
	6月14日	96年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	10.0	焼葉造林木			
	6月28日	96年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	5.0	焼葉造林木			
	7月27日	96年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	50.0	焼葉造林木			
	8月3日	94年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	200.0	焼葉造林木			
	8月5日	95年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	100.0	焼葉造林木			
	8月8日	94年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	275.0	焼葉造林木			
	8月8日	93年度造林地域 (BumiSekarAji) 社	75.0	焼葉造林木			
2	6月17日	Bungur レンジャーステーション、WK(WK)国立公園内	375.0	アランアラン成原 85% 天然林 15%	飼料用に草刈を行う不法侵入者のためである可能性が高い	WK国立公園のレンジャー25人を動員	
3	6月15日	Lampung Utara 県 Blambangan Umpu 部の Gabam Tahmi 生産林	35.0	赤松林木 (Boboisasa) (自給生産用保存林)	住民の火入れ活動	住民による消火	
4	7月19日	保安林 No.39	5.0	森林地域 5Ha 生産用保存林 15Ha	住民の火入れ活動	消火活動、現地所有者の逮捕	
5	7月29日	Bungur レンジャーステーション、WK国立公園内	250.0	アランアラン 100%	飼料用に草刈を行う不法侵入者のためである可能性が高い	WK国立公園のレンジャー20人を動員	
6	8月1日--3日	Tangkai Tebak 保安林 No.34	11.0	新造林木とヤシ (Bush)	不法侵入と思われる	職員による消火活動	
7	8月7日	Kuala Penet レンジャーステーション、WK国立公園内	30.0	アランアラン 100%	後木魚の釣り人と思われる	レンジャー15人を動員	
8	8月9日	Pangrijau レンジャーステーション、WK国立公園内	2,300.0	アランアラン 85% 新造林木 15%	伽羅木 (Gabrau) の伐採者と思われる	レンジャー70人を動員	
9	8月15日	Way Wankau 生産林 No.46 INHUTANI, 5社 Lampung 地区	177.0	不明	不明	不明	
10	8月17日	Piang Hjuu レンジャーステーション、WK国立公園内	1.0	アランアラン 100%	観光客のタバコの吸いがら	レンジャーとまじない師を動員	
11	8月19日	Susuk Baru レンジャーステーション、WK国立公園内	1,100.0	アランアラン 100%	伽羅木の伐採者と思われる	レンジャー28人を動員	
12	8月21日	Piang Hjuu レンジャーステーション、WK国立公園内 - 96年度 No.45 造林地域 (Silva Bahari Lampung?)	8.0 508.5	アランアラン 100% アカシア (Acacia) 新造林とヤシ (bush)	観光客のタバコの吸いがら 伐採者の可能性が高い	- レンジャー28人を動員 - 消防隊員を動員(機材使用)	
13	8月23日	No.24 の Bukit Pungur 保安林 (Kasau)	15.0	ソノクリン (Sonokeling) 類の新造林木	南 Sumatra に通じる林道から火が発生	不明	
14	8月28日	No.9 Kualapenu レンジャーステーション、WK国立公園内	35.0	アランアラン 95% 純松林 5%	草刈りを行う不法侵入者の可能性	レンジャー35人を動員	
15	9月1日	No.34 の Tangkit Uluak 保安林	11.0	ヤシ類 (Pakis) からなるやぶ	火元不明	林業普及員 3人と住民 400人を動員	

No	日付	場所	面積	植生	火災原因	消火対策	備考
16	9月1日	93年度造林地域 (Bumi Sekar Aj 社)	145.0	若木、苗木、支柱	住民の不法開墾の火入れ		
	9月2日	93年度造林地域 (Bumi Sekar Aj 社)	85.0	若木、苗木、支柱	Sweet Lindolampung 社の移住事業 ための道路沿いに発生		
	9月3日	93年度造林地域 (Bumi Sekar Aj 社)	16.0	若木、苗木、支柱	草刈りを行う不法侵入者の可能性	レンジャーカーと住民あわせて48人を動員	
17	9月2日	Kuala Temer レンジャーカー・スチーション、 WK 国立公園内	110.0	アワンアワン 90% 再造林 10%			
18	(8月2日--10日) 9月4日	No.46 別 隊 生 産 林 (Budilampung Sejauhna 社保有)	630.3	アカシア (Acacia) 類 ヤシ (Bauh) 614.331ha	魚探集者と盗伐者が火元と思われ る	ハンドポンプ、バケツ、放水器、 火たき、バクホ、ブルド ーザ、アルコンポンプ、ト ハツポンプ、トラクタ等の使 用	風が非常に強く、また竹 やぶ等が乾燥し、水源地が 遠いため消火活動は3日 間続いた
19	9月8日	Kuala Temer レンジャーカー・スチーション、 WK 国立公園内	40.0	アワンアワン 70% 再造林 30%	草刈りを行う不法侵入者原因と思 われる	レンジャーカーと住民あわせて26人 を動員	
20	9月9日	Kuala Temer レンジャーカー・スチーション、 WK 国立公園内	3,000.0	アワンアワン 75% 再造林 15%、天然林 10% メリナ (Melina Arborea) 造 林木	加藤木 (Gabanu) の盗伐者と魚探 集者の火の使用と思われる	消防隊員250人を動員	
21	7月--9月	No.37 Way Kibang 生産林 No.37 Gedong Wani 生産林	386.0		--不審火 (放火) --造林地域以外の火入れ活動	Dharmalutani Lestari 社員 60 人による24時間消火、住民へ の普及を奨励した、火入れ禁止 の標識設置、水巻の維持	車3台、バイク10台、 自転車5台、JhonDhere 2台、ラジオ無線機3組、 無線機9台、ウオーター タンク2台、スプレー20 台、ハンドソープ22台、 強を使用
22	9月11日	-98年度 No.45 生産林	463.0	-ア ル ビ ジ ア (Albizia Falcataria) 造林木 -ア ゴ ム 林	-住民の不法開墾の火入れ	SweetIndolampung 社の消防 隊員を動員	アワンアワン 1台、 水タンク 22台、ブルド ーザ 7台の使用
	9月12日	-91年度 No.45 生産林	120.0		-草刈りのための不法侵入		
	9月13日	-92年度 No.45 生産林 (Silva Inhutani Lampung 社保有)	907.0	-ア ル ビ ジ ア (Albizia Falcataria) 造林木	-住民の不法開墾の火入れ		
23	9月21日	国民公園 (元 No.19 保安林)	8.3	アワンアワン及び 再造林	コーヒ畑の伐採	レンジャーカーを動員	
24	7月11日--9月22日	No.34TangitTebak 保安メルクン松地区 林、INHUTANI 5 保安林 (修養ア ラ外)	62.0	再造林	不明	INHUTANI 5 社ランブン地区 全社員および住民・日雇いを動員	
25	9月18日--25日	No.34TangitTebak 保安 Labuhan 地区 林、INHUTANI 5 保安林 (修養ア ラ外)	56.9	再造林	不明	INHUTANI 5 社ランブン地 区全社員および住民・日雇いを動 員	
26	9月18日--23日	No.42 Rebang 生産林 INHUTANI 5 社ランブン地区	924.0	アルビジア及びアカシア造 林木	-住民の開墾 -獣害に発生	INHUTANI 5 全職員消火活 動	
27	9月25日	国民公園 (No.19 元保安林)	5.0	8485 再造林、比有地 71ha	不明	地元関係と住民を動員	
28	9月27日	- No.34TangitTebak 保安 林 Bukit Kemuning 地区 -No.43B 保安林 Palik Bukit 郡, Bayera 村	20.0 28.0	ヤシ 天然林と灌木	不明 南スマトラ州からの延焼	地元関係者と住民、林業関係者、 治安部隊を動員	

No	日付	場所	面積	植生	火災原因	消火対策	備考
29	9月12日--28日	No.22 Way Wyan 保安林 Kalirejo 郡 Sengiang Baru 村 Serdang Mulyo 地区	380.0	再造林木 楠木	住民	レンジャーと住民計 300 人その他関係者を動員	
30	9月27日--29日	No.34 Tangit Tebak 保安林	50.0	楠木とアランアラン	火元不明	各関係者及び住民を動員	
31	9月29日	No.4713 Bukit Barisan Selatan(BISS)14 立公園	600.0	原生林と楠木	登山者のタバコの吸いがら	関係職員を動員	
32	9月30日--10月2日	Rebang 森林支所 No. 42	1,078.0	アカシア マンギウム (Acacia Mangium) 造林木	住民の開墾	INHUTANI 5 の消防隊員を動員	
33	10月1日	Susunkaniharu レンジャーステーション ン、WK 国立公園内	7.0	アランアラン 45%、 Sonobrits 木 55%	住民の焼き畑	消防隊員、レンジャー、 Sukadana 警察官を動員	
34	10月2日	Pianghijau レンジャーステーション、 WK 国立公園内	30.0	再造林木とアランアラン	不明	WK 国立公園レンジャーを動員	
35	10月3日	-No.19 国民公園 Bogorojo 村 -No.22 保安林 Sumurbandung 地区 -No.22 保安林 Sindang Mukti 地区 -No.22 保安林 Sindang Awh 地区	6.0 32.0 25.0 120.0	やぶ ソノクリンの再造林木とア ランアラン 竹とアランアラン	民有地地の火入れ 不明 不明 不明	レンジャーと住民を動員 WK 国立公園レンジャー 100 人 を動員 住民その他 300 人以上を動員	
36	10月6日	No.36 Gunung Rajabasa 保安林、南ラン アン	28.0	再造林木とアランアラン	不明	軍地区指令部隊を動員	午後2時以降降雨
37	10月7日	No.22 Way Wyan 保安林	15.0	不明	不明	不明	
38	10月9日	No.34 Tangit Tebak 保安林、 Tanjung Raja 村	10.0	やぶ	不明	林業職員 60 人動員	
39	10月13日	No.46 Way Wyan 保安林 (Budi Lampung, Sojahtera 社所有)	569.2	やぶ	不明	郡対策本部と住民約 200 人動員	
40	10月13日--17日	No.24 Bukit Pungur 保安林	150.0	やぶとアランアラン	不法焼畑民の活動	レンジャー、森林支所職員、住 民計 126 人を動員	
41	10月15日	No.27 Pematang Sulah 保安林	25.0	商品作物とやぶ	住民の開墾の焼き払い	森林警察センター及び住民系 210 人	
42	10月16日	-No.19 国民公園(元保安林) Hurun 村 -No.19 国民公園(元保安林) Umbul Solo 地区 Aha, Leherkambang 地区 3Ha	6.0 7.0	やぶと住民の畑 やぶと Sonobrit 木	住民の不注意 林業職種以外の作物除去のための 火入れ	州森林局レンジャー 15 人を動員 州森林局レンジャー 15 人と住民 50 人を動員	
43	10月17日	No.19 保安林 Gunung Betung Umbul Kebagusan, Wiy ono 村, Gelong Tatan	20.0	ソノクリンとカリブアンドラ (Kalandra)	不法侵入者の開墾	レンジャーと消防隊員を動員	
44	10月19日	- BISS 国立公園(Way Cangruk の反砂側) - BISS 国立公園(Bukit Cinalung) - BISS 国立公園(Sekimanu, Tangas 村) - BISS 国立公園(Lombok Bukit Tobagan) - BISS 国立公園(Bukit Paneteh)	300.0 15.0 40.0 70.0 150.0	天然林と南洋林 天然林 天然林 天然林 天然林	...住民の農地開墾の焼き払い 一火が森林地域内に延焼	レンジャー 30 人を動員 レンジャー 4 人を動員 林業職員と住民を動員 レンジャー 3 人、村落指導者 兵士及び住民を動員	全消火隊員 3000 人を入 員動員

No	日付	場所	面積	犠牲	火災原因	消火対策	備考
45	10月20日	No.313 GunungSeminung 保安林 No.48BKruhiJanti 保安林 No.43BKruhiUtara 保安林 No.48Palakuh 山地保安林 KunlaPenet レンジャヤーステーション、WK 国立公園内	150.0 7.0 500.0 50.0 65.0	不明 ヤブ 不明 不明 草、杉地、ヤブ	保安林地域外から出火、Pemb. Sukuh 郡 Lambok 村 住民の焼き払い 不明 不明 鳥類の不法ハンター	レンジャヤースと住民を動員 レンジャヤースと住民を動員 レンジャヤースと住民を動員 レンジャヤースと住民を動員	20:30 現在まだ出火 焼失面積不明
46	10月24日	No.39 KotaAgungUtara 保安林 (Margajaya-PalangMenanti)	170.0	ソノクリン、カリアンドラ、コーヒ木、楠木	WaiPungbubuhan 地域からの出火	空中消火及び郡対策本部、住民、レンジャヤースを動員	
47	10月28日	No.19 国民公園(元 TanjungManis 保安林)	1.0	ヤブとアラニアラン	意図的な火入れ	レンジャヤースと住民を動員	
48	10月30日	No.19 国民公園(元保安林) UmbulSolo と UmbulSepakat の間	10.0	林業機械以外の作物除去のための火入れ(コーヒ一俵倒木)	意図的な火入れ	森林警備センター、レンジャヤース、住民 100 人を動員	
49	10月31日	No.3GunungRajabasa 保安林 (TanjungHeran 村)	2.0	造林木とコーヒ木	住民の森林開墾のための焼き払い	住民と林業職員を動員	
50	11月1日	-WK 国立公園(KaliBiru) - No.34TangkitTebak 保安林 (Dwikora 東部) - No.28Neba 山地保安林 & No.30Tanggamanus 山保安林	60.0 500.0 80.0	ガラシ (Celam)、レンガス (Rengas)、ヤブ INHUTANI 5 の復旧森林 地域とヤブ 不明	魚を採集住民 不明 不明	一国立公園職員と住民を動員 -レンジャヤース 31 人(超ランブン 15 人、北ランブン 10 人、天然資源保全センター 6 人)、住民 200 人を動員	火災発生 10月27日
51	11月3日	No.20PematangKubuato 保安林 (Rawang 村、Congkuri 村、PadangGerrmin 郡)	150.0	不明	住民の森林開墾のための焼き払い	一林業職員と住民を動員 家庭園へのアクセスが難しく 消火はまだ行われていない	火災発生 10月28日
合計			18,092.0				

出所 : ランブン州森林原野火災対策委員会報告本部 (11月4日現在)

備考 (火災区域内部) : 4, 408.9 Ha

生産林/遊林地域 : 2, 397.3 Ha

保安林国立公園 : 8, 586.0 Ha

計 : 18, 092.2 Ha

ランブンプ州森林火災記録

登録区域番号	区域名	森林利用区分	森林焼失面積	
			1997年9月30日現在	1997年10月31日現在
45,47	Sungai Buaya, Way Terusan (BSA社, SIL社年間操業区域)	産業造林	1,014.00	1,014.00
7,9	Way Kambas 国立公園	自然保護区域	7,757.50	7,859.50
----	Tahmi Giham (Blambangan Umpu-北ランブンプ)	生産林	24.40	24.40
39	Kota Agung Utara	生産林	5.00	175.00
34	Tangkit Tebak	保安林	22.00	32.00
45	Sungai Buaya (インフタニV社保有)	生産林	1,988.00	1,988.00
46	Way Hanakau (BLS社保有)	制限生産林	30.00	30.00
40,37	Gedong Wani, Way Kibang	?	386.00	386.00
19	Wan Abdul Rahman 国民公園 (元 Gunung Betung 保安林)	保安林	932.30	939.30
42	Rebang (インフタニV社保有)	生産林	924.00	2,033.00
43B	Krui Utara (Balik Bukit)	保安林	28.00	528.00
22	Way Waya	保安林	380.00	577.00
46B,47B,49B	Way Hanakau, Bukit Penetoh, Krui Barat (BBS国立公園内)	自然保護区	600.00	1,175.00
3	Gunung Rajabasa	保安林	-----	28.00
27	Pematang Sulah	保安林	-----	25.00
9B	Gunung Seminung	保安林	-----	150.00
48B	Palakiah	保安林	-----	57.00
合計			14,091	17,021

森林原野火災対策委員会・火災対策本部調べ(10月29日現在)

4 面談者一覧表

[日本側]

在インドネシア日本大使館	特命全權大使	川上 隆朗
	公使	服部 則夫
	参事官	川村 泰久
	一等書記官	河内 幸男
	一等書記官	八木 一夫
	二等書記官	竹山 健一
	二等書記官	樋田 幸浩
	二等書記官	野元 義文
	三等書記官	平島 周作
	三等書記官	二瓶 大輔
	三等書記官	相垣 一弥
	派遣員	村岡 大輔

JICAインドネシア事務所	所長	諏訪 龍
	次長	野田 豊記
	次長	中垣 長睦
	次長	佐々木 弘世
	所員	竹内 智子
	所員	乾 英二
	所員	辻 尚志
	所員	川端 岳郎
	所員	片山 裕之
	所員	田和 正裕
	所員	花里 信彦

JICA森林火災予防プロジェクト	リーダー	宮川 秀樹
	専門家	大塚 雅裕
	専門家	上田 具之

JICA派遣専門家 (テレビ番組制作)	薩摩	逸雄
---------------------	----	----

時事通信ジャカルタ支局	特派員	東 敬生
-------------	-----	------

NHK ジャカルタ支局	支局長	坂本 努
-------------	-----	------

週刊新潮	特約カメラマン	村上 昭浩
------	---------	-------

[インドネシア側]

科学技術応用庁 (B P P T)

次官 DR. IR. INDROYONO SOESILO

調整官 BAMBANG

技官 CHAIROMAN JOEWONO PUTRO

技官 IR. YUDI ADITYAWARMAN

国家災害対策委員会 (BAKORNAS)

調整大臣 IR. AZWAR ANAS

次官 IR. SOEYONO

次官補 HERNOWO HADIWONGGO

環境省

大臣 SARWONO KUSUMAATMADJA

大統領官房

副長官 SARDJONO

ランブン州政府

副知事 SOEWARDI

ランブン州災害対策本部 (SATKORLAK)

部長 LET. KOL. SUTOMO

[その他]

豪州消火チーム

隊長 CHRIS MARTIN

97.10.20 朝日新聞(夕)

森林火災に援助隊再派遣
村岡兼造官房長官は二十日午前の記者会見で、インドネシア各地で六月下旬から続いている森林火災の消火活動などに協力するため、外務省、消防庁などの専門家を四十三人で構成する政府の国際緊急援助隊を二十二日から派遣すると発表した。インドネシア側の要請にこたえたもので、九月下旬から十月上旬にかけての派遣に続き、二回目に

国際緊急援助隊は、ヘリコプターで上空から火災の状況を調べるモニタリング調査などを行い、政府が調達するヘリコプター二機も現地に送られる。期間は来月十一日ごろまでの三週間ほどを予定している。

97.10.20 毎日新聞(夕)

インドネシアに援助隊を再派遣
森林火災で
政府は20日、森林火災が続くインドネシア政府の要請を受け、国際緊急援助隊専門家を派遣することを決めた。東京消防庁職員ら43人で構成。22日から3週間、ヘリコプター2機

97.10.20 読売新聞(夕)

22日に森林火災対策の第2次援助隊派遣
村岡官房長官は20日午前の記者会見で、インドネシアで続く森林火災対策として、22日に第2次国際緊急援助隊・専門家チームを派遣すると発表した。インドネシア政府が正確な火災地点などを把握するためのモニタリング(監視・観測)活動での協力を日本政府に要請してきたため、今回の援助隊は外務省や消防庁、国際協力事業団(JICA)などの担当職員43人で構成される。滞在は約3週間の予定で、ヘリコプターによるモニタリング活動などを行う。援助隊が使用するヘリコプター2機は、民間大型輸送機を使って日本から搬送する。
政府は今回の森林火災に対し、第1次援助隊を9月29日に派遣、消火活動の指導や、住民の呼吸器系疾患の治療などに当たっている。

97.10.20 日本経済新聞(夕)

インドネシア火災で援助隊
村岡兼造官房長官は二十日午前の記者会見で、大規模な森林火災が続くインドネシアに対し、第2次国際緊急援助隊を派遣すると発表した。外務省、消防庁などの専門家を四十三人で構成、派遣期間は二十二日から約三週間の予定。

97.10.20 東京新聞(夕)

国際緊急援助隊第2陣を派遣へ
インドネシア火災
村岡兼造官房長官は二十日午前の記者会見で、インドネシアの大規模森林火災に対し、二十二日から国際緊急援助隊の第2次専門家チームを派遣すると発表した。
専門家チームは外務省、消防庁、国際協力事業団、東京、大阪、横浜、名古屋の各消防庁の職員計四十三人。ヘリコプター二機も日本から運び、上空から火災場所の監視などを行う。派遣期間は三週間。

日本、さらに緊急援助隊を派遣
 インドネシア火災
 政府は二十日、広範な森林火災に見舞われたインドネシアに対し、第二次国際緊急援助隊・専門家チームの派遣を決めた。緊急援助隊は、外務省、消防庁、国際協力事業団(JICA)

インドネシア火災で第二次援助隊を派遣
 村岡兼造官房長官は二十日の記者会見で、森林火災による被害が広がっているインドネシアに対し、政府の第二次国際緊急援助隊を派遣すると発表した。二十日に日本をたち、三週間の予定で火元の特定などの調査に協力する。政府は九月末に消防、大

などの職員四十三人で構成、ヘリコプターによる上空からのモニタリングなどを実施する予定で、二十二日に出発する。インドネシアは、六月下旬以降の森林火災により、すでに三〇万枚以上の森林などが焼失したほか、貴重な野生動物の生息地となっている自然保護区でも火災が発生している。被害は、インドネシア国内にとどまらず、近隣のマレーシアにも及び、工場の一時的な停止など周辺の経済・産業にも大きな影響を及ぼしている。このため、政府は緊急援助物資の供与や緊急援助隊の緊急援助要請にこたえるため、第二次国際緊急援助隊の派遣を決めた。

気汚染対策の専門家で構成する第一次援助隊を派遣し、主に大気汚染対策に協力した。今回は、六月下旬から続いている森林火災が依然として収拾に向かわないことから、ヘリコプター二機を日本から空輸して、空中からの火元の特定を行う。外務省、国際協力事業団(JICA)のほか、消防の専門家など計四十三人が現地向かう。

煙霧で客船衝突、4人死亡
 「ジャカルタ20日」共同アンタラ通信によると、森林火災の続くインドネシア・カリマンタン(ポルネオ)島南部のバリト川で十九日、小型客船と貨物船が激しい煙霧の中で衝突、乗客ら四人が死亡、二十一人が行方不明となった。カリマンタン島のほぼ全域が森林火災で生じるもや

に包まれており、熱帯林の中を走るバリト川流域も濃霧に覆われ、河川当局は事故当時の出帆の視界は三メートルに落ちたと指摘している。インドネシアでは今月一日にも、煙霧で覆われたスマトラ島南部の川で船触事故があり、九人が死んでいる。

しかし現地では依然、火災の勢いは衰えを見せず、事態は深刻で、とくに火災地点の多くが交通困難な山奥にあり、鎮火は進んでいない。こうした状況から、インドネシアの緊急援助の要請にこたえ、日本から新

たは国際緊急援助隊専門家チームを派遣することをし

インドネシアの森林火災 緊急援助隊派遣へ 政府
 政府は二十日、広範な森林火災に見舞われたインドネシアに対し、ヘリコプターによる上空からのモニタリングを行うため、国際緊急援助隊専門家チームを派遣することを決めた。メンバーは総勢四十三人で、外務省、消防庁、消防機関、国際協力事業団(JICA)から参加。一行は二十一日に現地へ向けて出発する。

インドネシア森林火災

東京消防庁19人、支援出動

インドネシアで続く森林火災のため、政府の国際緊急援助隊専門家チームの一員として現地に派遣される東京消防庁の職員19人の壮行会が21日、同庁で開かれた。現地へは同庁のヘリコプター1機も派遣し、消火活動の支援に当たる。

同庁の派遣隊は22日午前11時過ぎ、外務省や自治省の職員らで構成される国際緊急援助隊専門家チーム43人の一員として、成田空港からジャカルタへ向かい、11月1日までの3週間、火災現場のスマトラ島南部に滞在。また24日、同庁のヘリコプター「かもめ」を現地に空輸し、火災現場上空から赤外線カメラを使用し、火災の状況についての情報収集を行い、インドネシア政府の消火活動に対して助言や指導を行う予定。

インドネシア火事

消防ヘリが現地へ

世界最大級の輸送機で

山林火災の被害が深刻化しているインドネシア・スマトラ島で消火活動を支援するため、東京消防庁と名古屋消防局の中型ヘリコプター2機を、日本政府などからチャーターした世界最大級の輸送機「アントノフ」(全長六十九メートル)に積み込むための作業が二十四日、成田空港で行われた。同夜、現地に向けて出発する。

国際協力事業団による一九九一年五月のバンクロナシユのサイクロン災害以来二回目。現地には二十二日に日本を出発した国際緊急援助隊員約四十人が到着しており、今後、陸と空から消火活動を支援する。

米国とオーストラリアから派遣された航空機は既に現地で消火活動に当たっているが、煙霧のため空から正確な火災現場が把握できない状態。

日本から派遣される二機は搭載した赤外線カメラで火災の範囲を割り出し、地上の消防部隊に情報を伝えるという。

JICA チャーター機でヘリ 2機インドネシアへ

国際協力事業団

(JICA)はインドネシアの山林

火災に対する緊急援助活動の一環として、ヘリコプター二機を現地に輸送するため、ヘビリーフト社のアントノフ24をチャーターした。

アントノフはきょう二十四日の午後、成田空港からジャカルタに向けて出発する予定。東京消防庁のヘリコプター二機が搭載され、火災現場の上空から現地のモニタリング、消火の助言活動が行われる。

日本の救助隊の活動は、十一月八日まで行われる予定で、日本へのヘリコプター二機の輸送もアントノフ24をチャーターして実施される。

市消防局 消防ヘリ出発へ 山林火災のインドネシア

山林火災の被害が深刻化する中、名古屋市消防局の小西富夫企画調整主任は「消防職員の海外派遣は三度目だが、ヘリは初。海外で貢献できるのは素晴らしいことで、積極的に出動したい」と話している。

国際協力事業団によると、消防ヘリの海外派遣は一九九二年五月のバンクラデシユのサイクロン災害清い米二回目。現地には二十二日に日本を出発した国際緊急救助隊員約四十人が到着しており、今後、陸と空か

ら消火活動を支援する。名古屋市消防局の小西富夫企画調整主任は「消防職員の海外派遣は三度目だが、ヘリは初。海外で貢献できるのは素晴らしいことで、積極的に出動したい」と話している。

く続く霧煙 東南アジア

健康不安が深刻化

生態系も大変化の恐れ

【ジャカルタ23日】吉村文成 マラッカ海峡一帯を中心に東南アジア海峽部は七月以来、四カ月近く煙霧(スモッグ)に包まれてきた。シンガポールやマレーシアでは最近、季節風の交代で晴れた日がいづら増えたが、煙霧の原因となっている山林火災の火元であるインドネシア・スマトラ島やカリマンタン(ボルネオ島南部)では、濃い煙霧で太陽の見られない日々が続いている。人体や環境への影響が何十年後までも残るのではないかと懸念が広がっている。

難航する消火

消火には国際的な支援が寄せられている。オーストラリア、米軍などの航空機による消火活動がすでに始

まり、日本の第二次国際緊急援助隊も数日中にスマトラ島に入る。しかし、長引く乾燥と酷暑で消火活動は難航を極めている。太い樹木は表面は消えた

ようでも、内部は熱いまま。風が吹けばまた燃え上る。泥炭層の下層に移った火は、泥炭層を伝って遠く離れた所で地表に顔を出す。いったん消し止めた

■身体汚染

スマトラ島のジャンビ州を訪れた日本の第二次国際緊急援助隊の国井修国立国際医療センター医師は、大気中に最大二五四八P S I単位の微細粒子が浮遊しているのを見出した。「極めて危険」とされる四〇〇単位を大きく超えている。「こんな大気は何カ月もさらされた人々の健康被害についての報告はまだない。長期的な追跡調査が必要だ」と国井医師はいう。

香港大学のアントニー・ヘドレー教授(薬学)によると、微細粒子は肺胞や血管の中に入り込む。米カリフォルニア州の調査では、微細粒子で汚染された大気中で年間四十二日以上暮らすだけで、呼吸器系感

染症の罹患(りかん)率は大幅に上がる。「平均寿命が一三歳引き下げられる」との予測もある。

熱帯雨林についての人類の知識はまだごくわずかだ。レイさんは「何があつたかすら分らないままに、巨大な変化が進行する可能性がある」と警告する。

■熱帯雨林

すべての生き物が「煙霧、日照不足、水不足」の三重苦にさらされている。スマトラ島やリアウ諸島では、象の大群が人里に出没し、カリマンタンでは、オランウータンの赤ちゃんの密売人が出没しているらしい。カリマンタン中部では、煙霧で太陽が遮られ、昼間気温が例年より五、六度低いと伝えられる。

世界自然保護基金(WWF)のジャカルタ支部で生物多様性問題を担当している

ロン・レイさんは「昆虫類は体温を上げないと動けない。逃げることもできない」と心配する。煙霧被害が比較的軽いマレーシア北部でも「ミツバチの活動が鈍った」という報告がある。煙霧で飛ぶ能力が衰えているらしい。昆虫がいなくなれば、は虫類や鳥類はえさを失う。植物が花をつけない。交配できず実をつけない。その影響はかぎり先まで続くだろう。

く続霧煙 東南アジア

健康不安が深刻化

生態系も大変化の恐れ

【ジャカルタ23日 吉村文成】マラッカ海峡一帯を中心に東南アジア海域部は七月以来、四カ月近く煙霧（スモッグ）に包まれてきた。シンガポールやマレーシアでは最近、季節風の変化で晴れた日がいづらか増えたが、煙霧の原因となっている山林火災の火元であるインドネシア・スマトラ島やカリマンタン（ボルネオ島南部）では、濃い煙霧で太陽の見えない日々が続いている。人体や環境への影響が何十年後までも残るのではないかと懸念が広がっている。

難航する消火

消火には国際的な支援が寄せられている。オーストラリア、米軍などの航空機による消火活動がすでに始

まり、日本の第三次国際緊急援助隊も数日中にスマトラ島に入る。しかし、長引く乾燥と酷暑で消火活動は難航を極めている。太い樹木は表面は消えた

ようでも、内部は熱いままだ。風が吹けばまた燃え上がる。泥炭層の下層に移った火は、泥炭層を伝って遠く離れた所で地表に顔を出す。いったん消し止めた

想っても、数日するとまた発火する「いたちごっこ」が続いている。

身体汚染

スマトラ島のジャンビ州

を訪れた日本の第二次国際緊急援助隊の国井修樹立国際医療センター医師は、大気中に最大二五四八P S I単位の微細粒子が浮遊しているのを検出した。「極めて危険」とされる四〇〇単位を大きく超えている。

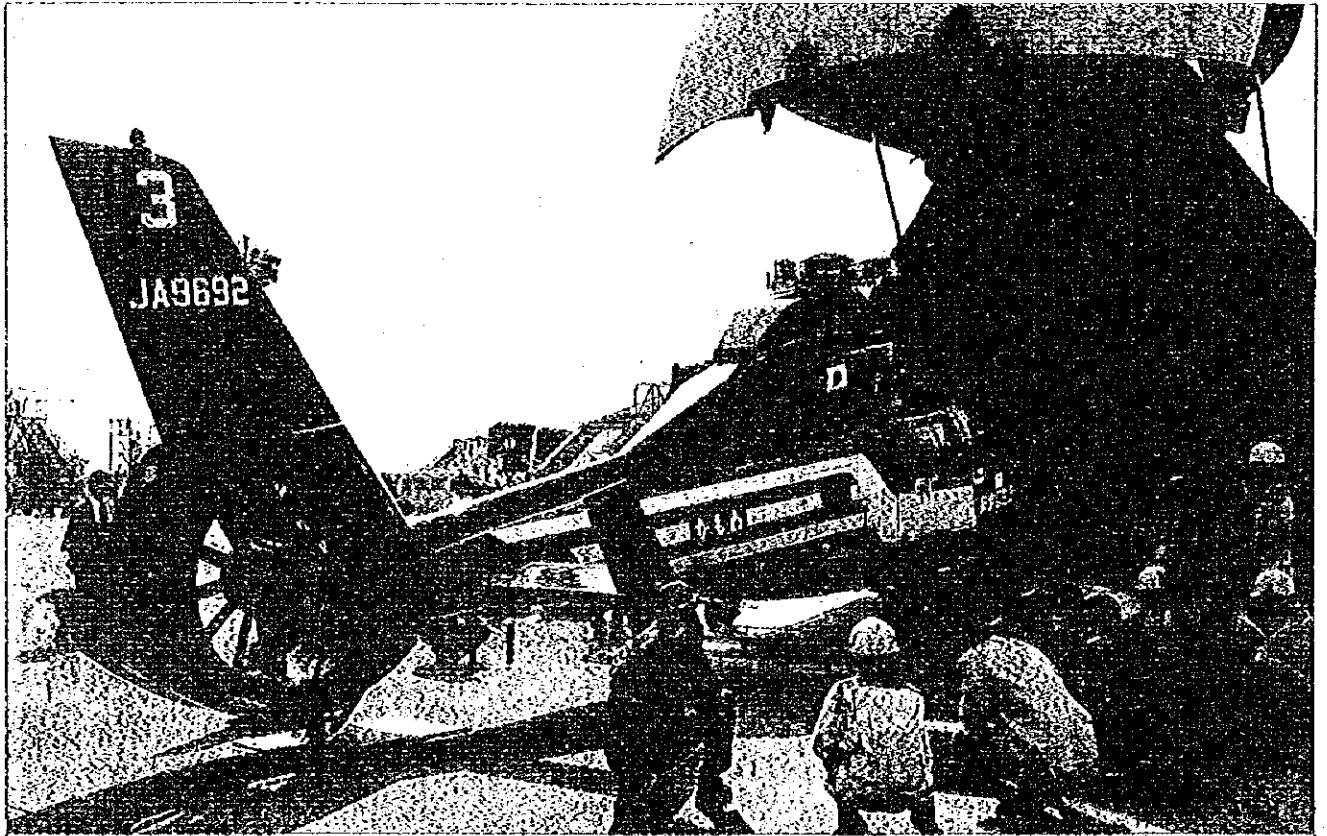
熱帯雨林

さらされた人々の健康被害についての報告はまだない。長期的な追跡調査が必要だ」と国井医師はいう。香港大学のアントニー・ヘドレー教授（薬学）によると、微細粒子は肺胞や血管の中に入り込む。米カリフォルニア州の調査では、微細粒子が汚染された大気中で年間四十二日以上昏らすだけで、呼吸器系感

染症の罹患（りかん）率は大幅に上がる。「平均寿命が一三歳引き下げられる」との予測もある。

ロン・レイさんは「は虫類は体温を上げないと動かない。逃げることもできない」と心配する。煙霧被害が比較的軽いマレーシア北部でも「ミツバチの活動が鈍った」という報告がある。煙霧で飛ぶ能力が衰えているらしい。昆虫がいなくなれば、は虫類や鳥類はえさを失う。植物が花をつけず、交配できず実をつけない。その影響はかなり先まで現れる。

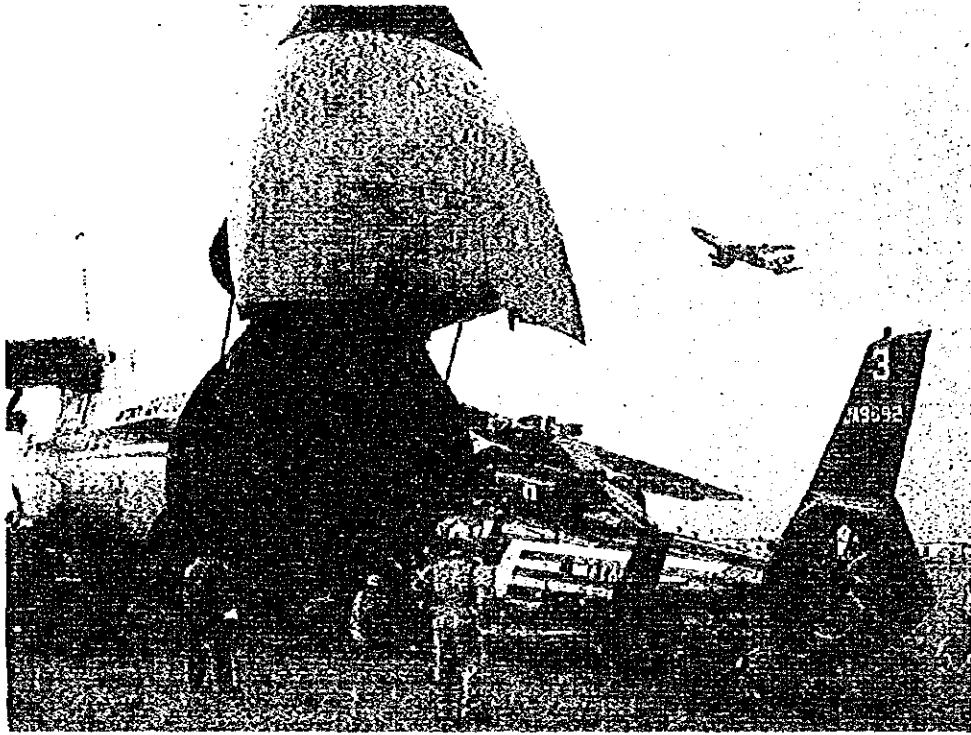
熱帯雨林についての人類の知識はまだごくわずかだ。レイさんは「何があつたかすら分らないままに、巨大な変化が進行する可能性がある」と警告する。



インドネシア各地で続く森林火災の消火活動に協力するため、東京消防庁と名古屋市消防局の消防ヘリコプター2機が24日、成田空港で旧ソ連製の大型輸送機に積み込まれ=写真=、ジャカルタに向かった。政府による国際緊急援助隊の第2陣で、消防隊

森林火災救援 消防ヘリ空輸

員ら43人はすでに現地入りしている。
国際協力連業団によると、すでに米国とオーストラリアの航空機が消火に当たっているが、煙に遮られたりして、てこずっている。日本のヘリは赤外線カメラで、地表の高温域を探し出すという。



消防ヘリ インドネシアへ

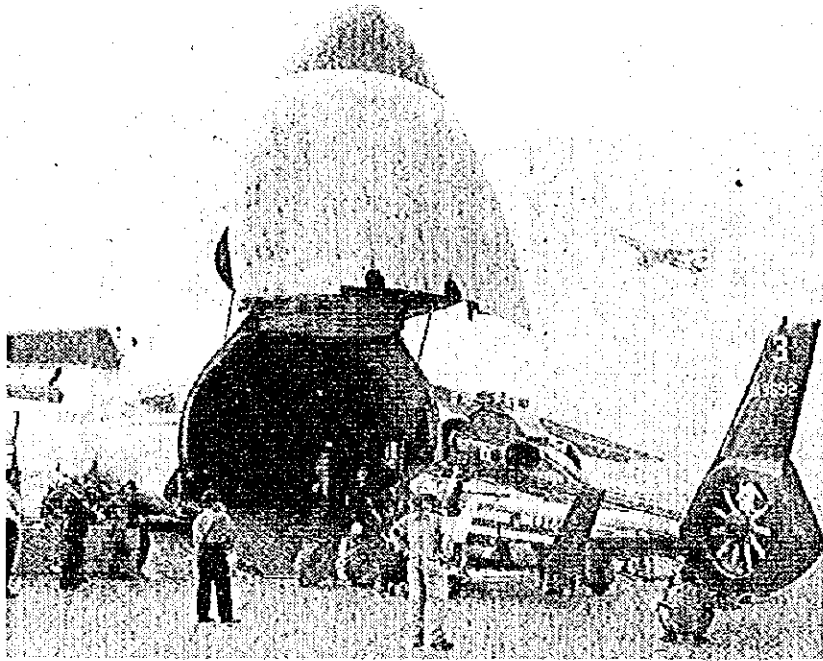
山林火災の被害が深刻化しているインドネシア・スマトラ島で消火を支援するため、東京消防庁と名古屋消防局の中型ヘリコプター二機が二十四日、成田空港で日本政府などがチャーターした世界最大級の輸送機「アントノフ」(全長六十九メートル)に積み込まれ、同夜出発した。

国際協力事業団によると、消防ヘリの海外派遣は一九九一年五月のパンフレタシュのサイクロン災害以来二回目。現他には二十二日に日本を出発した国際緊急援助隊員約四十人が到着しており、今後、陸と空から消火活動を支援する。

日本から派遣される二機は搭載した赤外線カメラで火災の範囲を割り出し、地上の消防部隊に情報を伝えるという。

山林火災の消火支援

インドネシアへ向かうため輸送機に積み込まれる東京消防庁のヘリコプター。24日、成田空港



インドネシア山林火災の消火活動を支援するため世界最大級の輸送機「アントノフ」に積み込まれる東京消防庁のヘリコプター＝24日午後0時15分、成田空港で

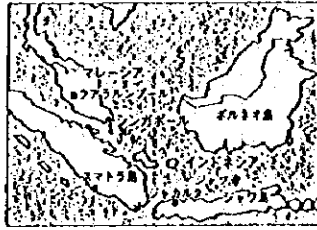
支援消防ヘリ 輸送機で出発

インドネシア火災
インドネシア・スマトラ
島での山林火災の消火を支援するため、東京消防庁と名古屋消防局の中型ヘリコプター二機が二十四日夜、成田空港から現地に向け輸送された。

インドネシア

煙害再び悪化

2都市 干ばつで500人餓死も 視界ゼロ



【シンガポール26日ロイター】野燒による季節風などのため

にインドネシアの森林火災による煙害が東南アジア一帯で再び悪化している。予報では期待の雨期入りはさらに遅れる見通しで、事態の好転は望めない。火元インドネシアのイリアン・ジャヤでは、同時発生した干ばつですでに約五百人の餓死者も出ている。

インドネシアからの情報によると二十六日、煙害の影響下にある都市は二十二から四十一に倍増した。このうちスマトラ島の二都市で「視界ゼロ」が報告されたほか、視界不良で四方所の空港が閉鎖された。同国では火災現場のスマトラとカリマンタン(ボルネオ)、イリアン・ジャヤが大きく煙害に覆われている。

同国気象庁によると「二十五日に西ジャワとイリアン・ジャヤで雨が降ったが、局地的だった」と言

う。同庁は南シナ海とインド洋方面の雨雲に期待していたが、オーストラリアからの乾いた風が依然、張り出して雨を阻んでいる。例年東南アジアの雨期は九月には始まるが、年末まで遅れるとの見通しもある。

シンガポール、マレーシア、ブルネイでも、強い南西の季節風のために先週半ばから煙害が再び悪化。シンガポールの汚染基準指数は恒常的に不健康指数を突破し、気管支炎など呼吸器に障害を訴える患者も再び増加している。四百六十人の餓死者を出したイリアン・ジャヤには緊急食糧や医薬品が送られ始めた。また雨不足や煙害による日照時間の不足から主要産品であるコメ、コーヒー、紅茶などの減産も必至だ。



ジャカルタの空港で27日、消火ホースの使い方をインドネシアの消防関係者に実演してみせる日本の消防士。後ろは消火用機器を搭載した日本の

森林火災 ただいま 消火特訓中

消火用ヘリで、2機のヘリと43人の消防士が森林火災が続くボルネオ、スマトラの両島で消火活動に参加する予定だ
=ロイター

インドネシア森林火災救援 日本第二次隊、きょう活動開始

【ジャカルタ27日路透電】インドネシアの森林

火災に起因する煙害被害に
対処するため、日本政府が
派遣した第二次国際緊急援
助隊・専門家チームが二十
七日、活動開始に先立ち、
ジャカルタのハリム・ブル
ダナクスマ空港で、ヘリコ
プター二機を使ってデモン
ストレーションを行った。
今回の第二次隊は東京消
防庁と横浜、名古屋、大阪
の三市消防局などの消防隊
員三十人と国際協力事業団
(JICA)職員ら計四十
三人で構成されている。

密度の濃い援助、重要に

国際協力
事業団 藤田総裁が方針語る



国際協力事業団(JICA)八日、あいさつのため山新
△の藤田公郎総裁は二十一日放送会館を訪れ、山形新聞

JICAの役割などを語る藤田公郎総裁 岩援助(ODA

社の相馬健一
社長、堀田稔
専務、波谷雄
司取締役論説
委員長、長岡
喬編集局長と
懇談、政府開

△予算が縮減される中、
今後は技術分野などで、よ
り密度の濃い援助が重要に
なる、とJICAの果たす
役割などを次のように語っ
た。

一、日本のODA予算は
一兆二千億円。二五年間、
世界一を誇っているが、財
政再建で来年度、一〇％削
減されることになった。し
かし、国にはJICAの技
術協力を拡充して、このと
の意向があり、これからは
一層、密度の濃い援助、量
より質の援助を目指してい
かなければならない。

一、海外での二年間の活
動を終え、毎年約千人の隊
員が帰国する。公務員には
休職参加制度があるが、必
ずしも希望する職場に再就
職できない隊員もいる。草
の根活動と貴重な体験を生
かせる職場に就けるようJ
ICAも努力している。協
力隊は海外にもあるが、徴
兵免除などの特典があり、

何もないのは日本だけ。見
方を変えれば本当のボラン
ティアだ。しかも定員の十
倍もの応募がある。こうし
た青年がいる限り日本の将
来は明るい。

一、駐インドネシア大使
として平成四年から二年
間、現地に赴任した。山形
県と姉妹県州の協約を結ん
でいるイリアンジャヤ州で
の山火事被害が懸念される
が、地理的にみてそんなに
心配はなさそう。JICA
は緊急援助隊を派遣した。

藤田総裁はきょう二十九
日午後一時から、山形クラ
ンドホテルで開かれる県勢
懇話会第三百六十五回例会
(公開講演)で「わが国と国
際協力」と題して講演する。

東南ア煙霧依然晴れず

【シンガポール29日】林

田裕喜、東南アジアのほぼ全域を覆ったインドネシアの山林火災による煙霧は、依然晴れる見通しが立っていない。同国当局者によると、呼吸器系の病気になった人は、周辺ですでに数万人に達したと見られる。

シンガポールでは、二十日ごろから再び煙霧に悩まされ、大気汚染度を示す指数は、「不健康」領域への出入りを繰り返している。環境省によると、煙霧が続いているのは、季節風が火元のスマトラ島やカリマンタン島から、マレー半島に向かっていているため。一方、マレーシアでは今月上旬以降、状況はかなり改善されたが、航空や観光産業への影響が表面化して

いる。

火元となったインドネシアでは、山林火災はさらに広がっている。二十八日は、スマトラ島で三か所、カリマンタン島で二か所、空港が閉鎖され、アズワル調整相（公共福祉担当）は二十八日、「森林火災はあと二、三か月続くだろう」と、早期収拾へ悲観的な見通しを示した。

同国の環境団体の試算によると、焼失面積は、政府の当初見積もりを大幅に上回り、百七十七万ヘクタールに達している。被害額は十一兆円（約三千八百億円）に上る。対策に後れを取った東南アジア諸国連合（ASEAN）の組織としての弱さを指摘する声も出ている。煙霧被害は七年に初めて観測され、以来、環境相会議

などで何度も対策の必要性で合意したにもかかわらず、今回の事態を招いたからだ。

編集手帳

インドネシア各島の森林地帯は泥炭層の上に成り立つ。植物が枯死・堆積したその層にまで火が潜り込み、

じわじわと燃え広がっていく◆大規模な森林火災が伝えられて、すでに四か月前、ほとんど雨が降らず、火の勢いは衰える気配がない。煙霧による呼吸器疾患で少なくとも四人が死亡、二十万人が何らかの被害を受けているという◆「周辺の町でも境界は百村以下、車のヘッドライトをつけても対向車が見えない。のどや目がすぐ痛くなる」。国際緊急援助隊の第一次隊に参加した国際協力事業団職員、野口久尚さん

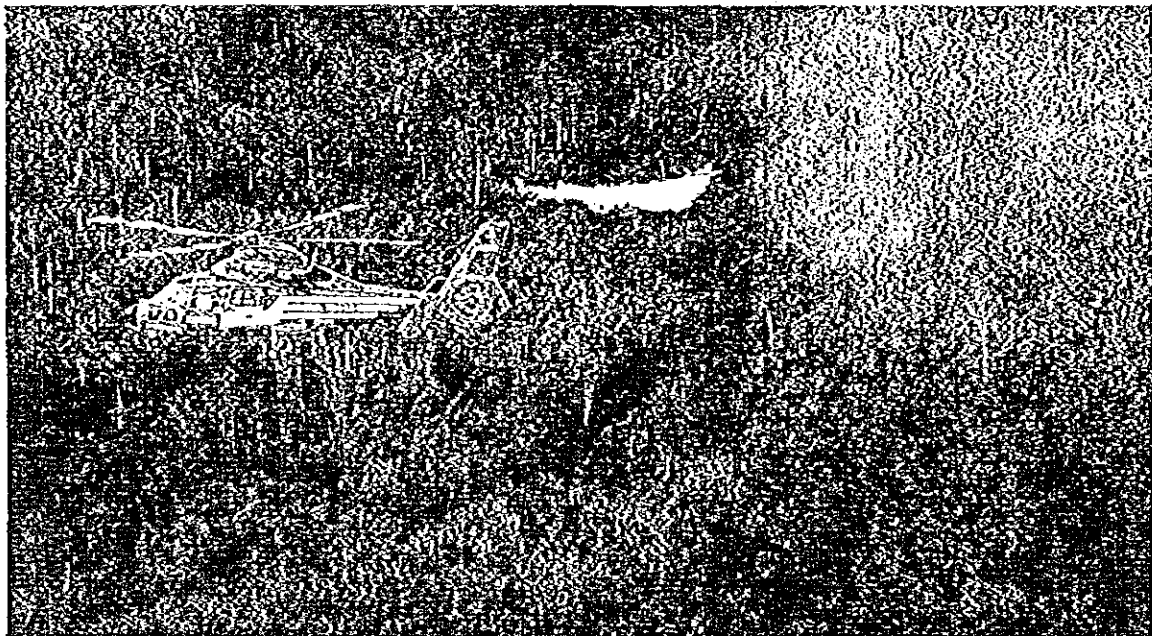
の報告だ◆同事務所を事務局に緊急援助隊が発足して十年、各国の地震や洪水被害などに際し、これまで三千五百派遣された。インドネシアの森林火災では、九月派遣の第一次隊と交代して、第二次隊がすでに現地入りしている◆東京消防庁はじめ大阪、横浜、名古屋各消防局のベテラン消防士ら総勢四十三人だ。ヘリコプター二機を持ち込み、スマトラ島東部のランボンを基地に活動を始めている◆例年なら今ごろ雨期に入るが、今年はまだ遅れる見通しだという。これも今世紀最大のエルニーニョに起因するの。環境団体の試算で、焼失面積は百七十七万ヘクタール、日本の四国全体に匹敵する広さに拡大している。

編集手帳

インドネシア各島の森林地帯は泥炭層の上に成り立つ。植物が枯死・堆積したその層にまで猛火が燃り込み、じわじわと燃え広がっていく。◆大規模な森林火災が伝えられて、すでに四か月前。ほとんど雨が降らず、火の勢いは衰える気配がない。煙霧による呼吸器疾患で少なくとも四人が死亡、二千人が何らかの被害を受けているという。◆周辺の町でも境界は百メートル以下、車のヘッドライトをつけても対向車が見えない。のどや目がすぐ痛くなる。◆国際緊急援助隊の第二次隊に参加した国際協力事業団職員、野口久尚さんの報告だ。◆同事業団を事

務局に緊急援助隊が発足して十年、各国の地震や洪水被害などに際し、これまで三十五回派遣された。インドネシアの森林火災では、九月派遣の第一次隊と交代して、第二次隊がすでに現地入りしている。◆東京消防庁はじめ大阪、横浜、名古屋各消防局のベテラン消防士ら総勢四十三人だ。ヘリコプター二機を持ち込み、スマトラ島東部のランポンを基地に活動を始めている。◆例年なら今ごろ雨期に入るが、今年はまだ遅れる見通しだという。これも今世紀最大のエルニーニョに起因するの。環境団体の試算で焼失面積は百七十万平方メートルの四割全体に匹敵する広さに拡大している。

山林火災の現場を捜してスマトラの山中を飛ぶ東京消防庁の「かもめ」。右後方で、オーストラリアの小型機が放水している。ヘリ「名古屋号」から、吉村が



ジャカルタ6日「吉村文蔵」東南アジア各国を巡る煙霧(スモッグ)の元凶であるインドネシアの山林火災を、日本の第二次国際緊急援助隊のヘリコプターに同乗してスマトラ島上空から見た。急しゆんな山岳地帯の斜面を赤い火がすらすらと走り、白い煙があちこちで上がっていた。援助隊のヘリは東京消防庁の「かもめ」と名古屋消防局の「名古屋号」の二機。「かもめ」は現地上空から火災状況などを伝えるテレビ伝送システムなどの機材を搭載している。記者は「名古屋号」に同乗した。スマトラ島南端のランポンの港から西に約三十、山岳地帯の上空に入ると、緑のジャングルの中に赤茶けた枯れ木で覆われた一帯が映く。七月以来の火災で燃えた幹木、火は苔や枯れ枝などを広げて広がり、木々は立ったままいっせいに、枯れていっている。現地の道路では容易に近づけない山中。

急斜面ぬい 日本隊ヘリ

インドネシア山林火災

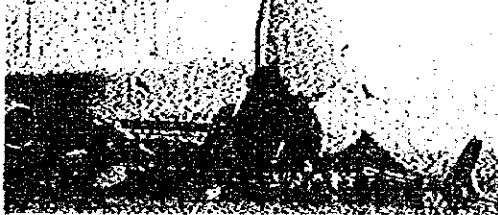
大地が火鉢 いぜん猛威



▲燃える火山を調査する
隊員らニランブン村で(現
地写真は東京消防庁提供)

「熱源どこだ」 暑さ下痢(ころえ)

インドネシア火災



ロシア製機でジャカルタに到着
した日本のヘリコプター。10月25日

日本援助隊活動報告

インドネシア火災は、深刻な被害となって現れてから約二カ月が経過した。しかし、火勢は弱まるばかりか東京都とほぼ同じ約十八万石の森林を焼き尽くし、今なお周辺各国に被害を及ぼすなど被害を拡大させている。火は樹木だけでなく、土中の泥炭層も燃やして出している。地元は「雨に期待するしかない」とお手上げ状態だが、その雨もエルニーニョ現象のせいがか消えないのか、約三週間にわたって連続大雨防止に携わった日本の国際緊急援助隊員がこのほど帰国、その隊員の体験を報告する。

外務省から東京消防庁、名古屋消防局などの消防関係者を中心とする国際緊急援助隊四十三人が出発命令が出たのは十月二十一日。森林火災の状況を把握するためのヘリコプターによる「モニタリング活動」が主目的だった。日本からの国際緊急援助隊派遣は八回目で、ヘリを伴うのは一九九一年のパンングラシユ地震以来、同日のこと。

二十一日の出発はオランダの航空会社が保有する世界最大のヘリコプター「シコク」をチャーターし、二機のヘリを積み込んだ。ヘリ部隊を指揮した東京消防庁航空隊の隊長、消防員らからは「パンングラシユ消防隊はシコクが活躍の場だ」と期待が高かった。しかし、現地の状況は想像以上に悪化していた。火災は、ひとりとまはらず八、九百回、「日本国内では見られない規模」に達していた。火災は、ひとりとまはらず八、九百回、「日本国内では見られない規模」に達していた。火災は、ひとりとまはらず八、九百回、「日本国内では見られない規模」に達していた。

都市火災でのヘリによる空中消火は芳しくないという。消防関係者によると、燃焼が激しい火災で、住民が「なせヘリで消さないのか」と怒り、声を上げた。しかし、燃焼水層や燃焼時の水蒸気、空気を考えなければならぬという。その火災が、かきと研究が本格化し、二十日には大掛かりな都市消火実験が行われる。

カトラ、コバ(市村)隊員、(山本)隊長、(熊谷)副隊長、(野崎)の隊員らに追われたが、赤外線カメラを使い、あちこちから煙が立ち、火をインドネシア軍を中心とする災害対策本部に通報する仕事を中心としたと、苦勞を覚える。

インドネシアで発生した
大規模な森林火災の国際救

インドネシアの森林火災 現地入りの3人帰国 ヘリで情報提供担当



消防隊員(右)に現地活動の様子を説明する関係者

消防隊・専門家チームの
メンバーとして、先月二十
日、蘭淳一助役に帰国報告

二百から現地入りしていた
大阪府消防局の土井一・消
防司令官ら三人が十四
日、蘭淳一助役に帰国報告
を行った。

三人は八日までの十八日
間、四十人の日本チームと
ともに、スマトラ島南部の
ランパン空港を拠点に活

躍に戦った状況下、消防ヘリ
で計五十四回にわたるフラ
イトを飛ばし、赤外線画像力
メラなどで火災規模や延焼
方向を情報提供した。

気温四十度、湿度八〇％
のなかで、三人は下痢と嘔
吐に見舞われながらも奮
闘。一時はそのまま煙が舞
うように立ち込め、土井消防
司令は「山間部の有線飛行
行でヒヤリとする時があっ
た」。片山雅義、消防司令
樋三と、田島康男、消防
司令樋三は「現地の消防
関係者らに、的確な情報取
集のノウハウを伝授できた
と思う」と話していた。



【ジャカルタ十九日】吉村文成「ジャカルタに十八日夕、雷を伴う激しい雨が約一時間にわたって降った。写真、A.P.、エルニーニョ現象などの影響で雨期入りが遅れ、山林火災による深刻な煙霧被害を周辺国に及ぼしたインドネシアだが、国内各地で十九日も降雨が

待ちに待った 「恵み」の雨期 山林火災のインドネシア

報告され、気象庁は雨期がようやく到来したという。もっとも、降水量は不十分で、本格的な雨期入りは十二月にずれ込みそうだ。アスワル・アナス公共福祉担当副総相によると、衛星写真で山林火災の地点を示す「ホットスポット」も二カ所を残すだけになった。

燃えているインドネシアの大火事

七月以来燃え続けるインドネシアの山林火災は、一向に鎮まる気配を見せない。特に酷いのがスマトラ島とカリマンタン島。その消火活動に協力すべく、わが日本からも、計二回七日まで「二大国際緊急援助隊」が派遣された。村上カメラマンは名古屋消防局のヘリコプターに同乗、火災の様様を伝えて来た。

撮影・村上昭浩

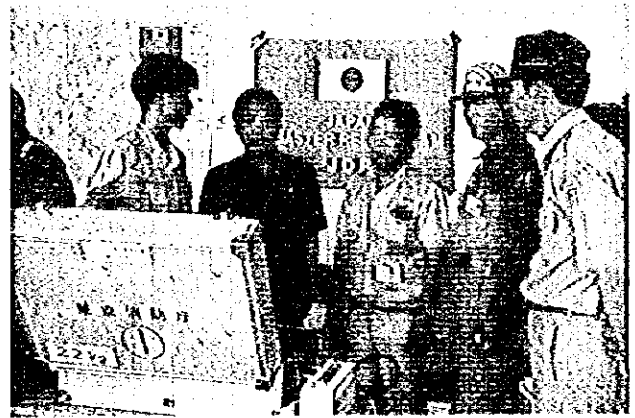
NOW &
NOW



▲ランブン市北西60°のワインカンバス国立公園
 (広さ13万㊦)は10月20日頃から燃え始めた



▲NGO(民間ボランティア団体)が火災現場を記録撮影



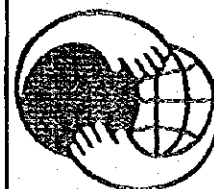
▲ヘリからのビデオ映像、赤外線映像を地上で受信する日本隊員。今日は地元ランブン州副知事が視察に訪れた

杓で水を撒いて消火活動。焼石に水の印象だが結構火の流れが
食い止められるという。



▲ジャンビ州郊外の小学校で地元のNGOがマスクを
配布(右)南スマトラ州の州都パレンバンは昼でも
煙でかくの如し(左)
◀大火の後の無惨な大地。下草ばかり燃え木は立ち枯れる

ODAの動き



TEL. 03-3580-3311(代表)

FAX. 03-5511-8638

JAPAN

Official Development Assistance

目次

1. インドネシア森林火災災害に対する我が国の支援
国際緊急援助室(内線: 2910)
2. UNDP「人間開発報告書97」の発刊と人間開発セミナーの開催
国際機構課(内線: 2717)
3. モンゴル支援国会合
有償資金協力課(内線: 2718)

巻頭コラム

パラグアイ「東部農村地域給水計画(1/2期)」機材供与式典

パラグアイ農村部では、飲料水や農業用水の確保が大きな問題となっています。パラグアイ政府は、穀倉地帯であり人口の90%が居住する東部地域の給水率を高めるため、300メートル級の井戸を25カ所に設置することを計画しました。日本政府はこの計画のための機材を供与するとともに、このうちの4ヶ所の井戸設置に協力することとしています。残り21カ所の建設には世界銀行の資金が利用されます。

6月30日の機材供与式典は、大統領官邸の前で、ワスモン大統領をはじめ、ヴィドヴィッチ厚生大臣、クリスタルド厚生省環境衛生局長等、錚々たるメンバーが参加して行われました。この日、大統領官邸の前の道路は通行止めとなりました。二列に並べられ、両国旗も美しく飾り付けられた大型機材は実に堂々たるもので、道行く人々の関心の的となり、たくさんの市民も参列する結果となりました。式典の途中で、井戸掘削機の鉄塔部分を垂直に立てて、ドリルを上下に始動するデモンストレーションが始まると、人々の間からどよめきとため息が漏れました。

ワスモン大統領はスピーチの中で、これまでの日本の援助に言及して感謝の言葉を繰り返し述べました。また、大統領は技術者出身であることもあり、式典終了後も熱心に機材を視察し、運転席に登るなど、しばしの間興味深く一つ一つの機材を見て回り、満足そうにうなずいては日本大使と握手を交わしました。

(在パラグアイ共和国大使館からの報告)

発行協力

(財)国際協力推進協会 国際協力プラザ / TEL.03-5423-0561 FAX.03-5423-0564

インドネシア森林火災災害に対する我が国の支援

経済協力局国際緊急援助室

インドネシアで6月下旬に発生した森林火災は、エル・ニーニョ現象による雨期の遅れにより、8月末から広範な地域に広がり、これまでに25万ヘクタールを超える森林・農地を焼き尽くされ、現在も延焼中です。この火災による被害はインドネシア1国にとどまらず、周辺のASEAN諸国にも及んでおり、人々の健康や環境、更には経済にも非常に大きな影響を与えています。こうした状況に対し、インドネシア政府は、国軍や地域住民を動員して、人海戦術による消化活動を行っていますが、火災箇所が多く且つ広範囲にわたっているために、火勢を押さえることが出来ず、我が国他に対する支援の要請がなされています。

これに対し、我が国は、今回の森林火災の被害がASEAN諸国にまで及ぶ極めて大きなものであることに鑑み、これまで次の様な援助を実施してきています。

(1) 緊急援助物資の供与

9月24日(水)、インドネシア側から要請があった背負式消火用水囊300個(約1,739万円相当)を供与しました。

(2) 国際緊急援助隊・専門家チームの派遣

9月26日(金)、インドネシア政府の要請に応じて、森林火災の消火、及び煙害が人体に及ぼす影響に関し、専門的助言・指導を行うため、国際緊急援助隊・専門家チームを派遣しました。

同チームは、消火専門家、医療専門家等6名で構成され、9月29日(月)から10月10日(金)まで12日間、森林火災及び煙害の深刻なスマトラ島中央部のジャンビ州において調査を実施、調査結果をインドネシア政府に報告して帰国しました。

(3) 草の根無償資金の供与

10月1日(水)、インドネシア赤十字に対し、防塵マスク等の購入費として860万円の草の根無償資金を供与しました。

(4) 緊急援助物資の追加供与

上記(ロ)の専門家チームの調査の結果、現地では消火用の資機材が極度に不足していることが判明したため、10月9日(木)、以下の物資を追加供与(約7,500万円相当)しました。

- ・背負式消火用水囊 : 300個
- ・可搬式消火ポンプセット : 50セット
- ・携帯式拡声器 : 50台
- ・無線機 : 50台

更に、インドネシア政府からヘリコプターによるモニタリングにつき強い要請が行われたことに応じて、政府は現在ヘリコプター2機を携行する概要以下の第2次国際緊急援助隊・専門家チームを派遣中です。

<派遣概要>

- ・派遣内容：国際緊急援助隊・専門家チームとして、総勢43名（外務省、消防庁、東京消防庁、横浜・名古屋・大阪各市の消防局、JICA等の職員）及びヘリコプター2機を派遣。
- ・派遣期間：平成9年10月22日（水）～11月11日（火）（3週間）
- ・活動場所：スマトラ島南部ランブン（ランブン州）。
- ・派遣目的：本邦より携行するヘリコプターにより、上空より火災地点、火災状況のモニタリングを実施。また、同モニタリング結果に基づき、現地で活動している地元の消火チーム等に対して、助言・指導を行う。

<現在の活動概要>

同チームは、10月27日（月）に、ヘリコプター2機とともに活動拠点となるランブン州ランブン市（ジャカルタより約210Km）入りし、同28日（火）よりモニタリング活動を開始しました。

10月30日（木）までに、同チームは一日2回乃至3回のフライトを実施し、新たな火点の発見やモニタリングの結果に基づく適切な消火地点の指摘等の成果を上げています（実際に同チームの消火地点の指摘に基づき、慶州チームの飛行機が空中から水の散布を行いました）。

ヘリコプターによる上空からのモニタリングの結果は、写真またはビデオの形で現地の消火チームに提供することによって、正確な火災状況（火災地点の確認及び延焼方向等）を踏まえた一層効果的な消火活動を実施することが可能になるものと期待されます。

NEWS & TOPICS

インドネシアの森林火災およびマレーシアの大気汚染、シンガポール石油流出事故に、国際緊急援助隊（JDR）派遣

スマトラ島とボルネオ島における森林火災が主因といわれる塵灰による大気汚染が周辺国を覆い、乾期の長期化とも重なり、住民への健康や交通機関への影響が深刻化した。また、火災発生地であるインドネシアでは、スマトラ島の一部やボルネオ島のカリマンタン全域において約3万2千人が呼吸障害を訴える状況になったとの報道もある。

こうした背景の下、日本政府は9月24日にJICAを通じ緊急援助を決定、9月27日、9月28日に両国へ援助物資（背負い式消化水筒600台等）を送り、9月29日～10月10日の期間には、専門家チーム（インドネシアに対する消火および医療面の助言を行う専門家チーム6名、マレーシアに対して環境および医療面の指導・助言を行う専門家チーム6名）を派遣した。

疫学上がつて例のない大気汚染状況

インドネシアの南スマトラへ派遣された専門家チームの國井 修氏（国立国際医療センター 医師）は、医療面の助言を行うに当たり、大気汚染と住民の健康への影響の2点で報告をまとめているところだが、現地の状況について「咳き込みが止まらず、道路上では対向車が見えなくなる。大気中のCOは、大都市ジャカルタなどの交通混雑箇所の5倍以上を測定している」と語る。

また、人体の肺胞奥にまで達しやすい10ミクロン以下の浮遊微粒子が空気中に含まれる率が非常に高く、米国で作られた大気汚染基準に照合すると、避難勧告が出される数値の3倍以上にもなり、これは疫学調査上がつて例がないという。

一方、保健省や地方衛生部の関係者によると、南カリマンタンでは、肺炎の患者数が通常



泥灰塵を伴った地中火、飛び火によって、森林火災は広範囲で突発的に突火・延焼した（上＝南スマトラ、パレンバン周辺で）。森林火災に伴うかつて例がないほどの煙害により住民の多くが呼吸器障害を訴えている（右＝パレンバン市内の診療所で）

の8倍以上と報告されており、國井氏らの調査では、住民の91%が呼吸器障害を訴えている。特に、老人と子供の重症度が高いという。

煙害の深刻化へ第2次国際緊急援助隊専門家チームを派遣

インドネシアの森林火災は、新たにスラウェシ島やジャワ島東部においても森林火災の発生が認められるなど、煙害の広がりとともに状況は一段と深刻化。一部では泥炭層にまで達する火災となっていることが明らかになった。

インドネシアでは、昨年から行われているJICAのプロジェクト方式技術協力「森林火災予防計画」を通じ人工衛星を利用した発



インドネシアへの第2次派遣のJDR専門家チーム（南スマトラ、ランポン空港で）

火地点の確認作業を実施。同国では引き続き空軍機を投入しての人口降雨を試みる一方、消防隊員や国軍、住民組織を動員しての消火作業を行った。また、空中消火については、オーストラリア、米国からの支援を得て展開されたが、これを効果的にするために火元の詳細な特定と延焼状況把握が必要となった。

これらを受けて、第2次国際緊急援助隊専門家チームが派遣され、10月22日、外務省、JICA、消防庁、東京消防庁、横浜市消防局、名古屋市消防局、大阪市消防局などから参加の計43名が日本を出発。また、消防のヘリコプター2機は大型輸送機アントノフによって空輸された。11月11日まで3週間にわたり、インドネシア関係機関および他国援助機関と協力し、ランポン州において消防ヘリコプターによる火災状況のモニタリングと、その結果に基づく消火のための助言を行った。

シンガポール石油流出災害救済

10月15日午後9時頃（現地時間）、シンガポ

地方自治体との連携 具体的な論議進む

国民参加型協力推進基礎調査

「地方自治体の国際協力事業への参加（フェーズ1）」

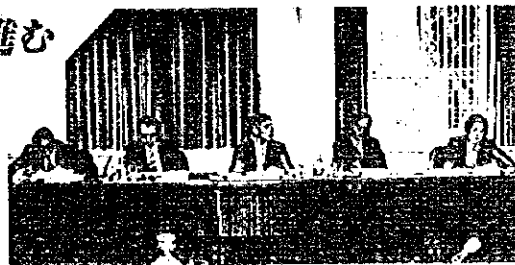
国総研では今年9月から、地方自治体の国際協力事業への参加についての調査を実施しています。この調査は鈴木佑司法政大学法学部教授を座長とし、11の地方自治体の国際交流・協力担当課長、学識経験者などが参加し、自治体のODA、JICA事業への参加についての基本的方向性と具体論についての検討を行うものです。支部、センター、各部職員からなるタスクフォースも設置し、JICA—自治体連携についてもそれぞれの経験に基づく具体的な論議を進めています。

JICAと自治体の連携は、JICA内では援助ニーズの多様化と援助基盤の強化、

途上国における地方自治体の強化、国民参加型協力の推進、支部・センターの機能強化などの文脈で語られています。

一方、地方自治体では、国際貢献、住民の国際意識の醸成、地域の活性化などさまざまな目的をもって国際協力を実施しており、JICAの実施する国際協力とは一部重なりつつも、独自の国際協力を展開しています。これをさらに進めていくために、ODAを自治体にも配分すべしといった議論もあります。

この調査では自治体とODA、JICAの新たな協力関係の構築をめざして制約要



11月18日、第3回会合が開かれた

因をも明らかにしたうえで双方にメリットのある連携の方向性、具体策などについての提言を行っていく予定です。

平成10年度にはフェーズ2調査として海外調査を実施し、地方自治体の国際協力についてより包括的な検討を行ったうえで最終提言をとりまとめる予定です。

(国総研調研課長代理 〆版)

JDRインドネシア森林火災

JICA職員の頼もしさに感激!



東京消防庁警防部警防課長補佐 市村 近夫 さん

深刻な被害が続くインドネシアの森林火災。10月22日には、森林火災の状況を把握するため、ヘリコプター2機を伴った第2次専門家チーム43名の派遣が行われた。東京消防庁、横浜市消防局、名古屋市消防局、大阪市消防局など消防関係者を中心とする同チームは、赤外線カメラなどを駆使して広範囲に及ぼる発火箇所をモニタリングし、インドネシア側の消火作業に大きく貢献した。

今回、ヘリ部隊の副隊長として活躍した市村さんに、JICA職員の仕事ぶりについて聞いた。

女性職員の活躍に脱帽

現地ではランブン空港を空港指揮本部にして、ヘリによる活動を行いました。日中の温度は43度、湿度も80~90%もありました。その反面、ホテルは冷房が効きすぎていてその温度差などから体調を崩し、かなりの人が下痢に見舞われました。そんななかで心強かったのは、石井さん(医務二課)、竹内さん(インドネシア事務所)という2人の女性の存在でした。今回は、ヘリの準備のために先に3名の隊員がランブンに入ったのですが、その頑強ながら現地の言葉のできない3人の隊員を石井さんがバリバリと引率していく姿には頼もしさを感じました。2人とも着さのなかで風圧の強いヘリの発着に立ち会い、隊員が降りてくると駆け寄ってきておしぼりや水を差し出して、体調に不安のある隊員のために空港に医療班を常駐させるようにしてくれました。下痢の隊員にはおむつまで用意してくれたほどで、われわれに最大限の仕事が

できるよう配慮してくれている、という気持ちがいしひしと伝わり、本当に頭が下がる思いでした。

JICAの別府な体制に安堵

消防関係者は緊急援助隊で派遣される場合、通常は「救助」で行くのですが、今回は、山火事の専門家チームという初のケースでしたので、いろいろと不安があり、また、ほとんどの隊員が初めて開発途上国に行くわけですから、活動内容もさることながら、現地での健康や生活なども心配でした。ところが、現地にはJICAの事務所があり、所員の方々がサポートしてくれました。現地の生活はもちろん、通貨事情など細かいところまで実に多くの情報をもっているのには驚きました。乾さん(インドネシア事務所)、田和さん(同)、今村さん(筑波国際セ

ル航空で火災現場のモニタリングを行なう日本ヘリ



ランブン空港でオーストラリアの消火チームと打ち合わせを行なう石井JICA事務所次長(中央)と市村副隊長(左)

ンター)、神さん(名古屋国際研修センター)などと一緒に若い職員の方たちの頑張りぶりが記憶に残っています。消防庁での私の仕事は、今回の緊急援助隊のように国内外の災害へ職員を派遣する窓口。今回、自ら緊急援助隊を経験できたことで、後輩たちにいいアドバイスができると思います。

JDRへのリクエスト

派遣される立場になって二、三、気づいたことがあります。まず、既婚者として同行するJICAの職員もユニホームを作ってはどうか。成田空港での結団式で感じたことなのですが、われわれははじめからユニホームを着てますが、JICAの方はスーツにネクタイ、女性の方はワンピース姿。正直いって「あれ、こんなんでは現場で仕事できるのかな?」と思ったんです。それは杞憂に終わりましたが、最初の段階からチームとして一体となるには、そうしたところも必要ではないでしょうか。

また、隊員たちの心配ごとにはやはり健康面、個人用の医薬品バックなどがあれば不安解消につながると思います。

そして、JDRのグッズなどがあればいいなあ、と。現地での交流促進にも一役買うと思うんですよ。